

川柳の権証

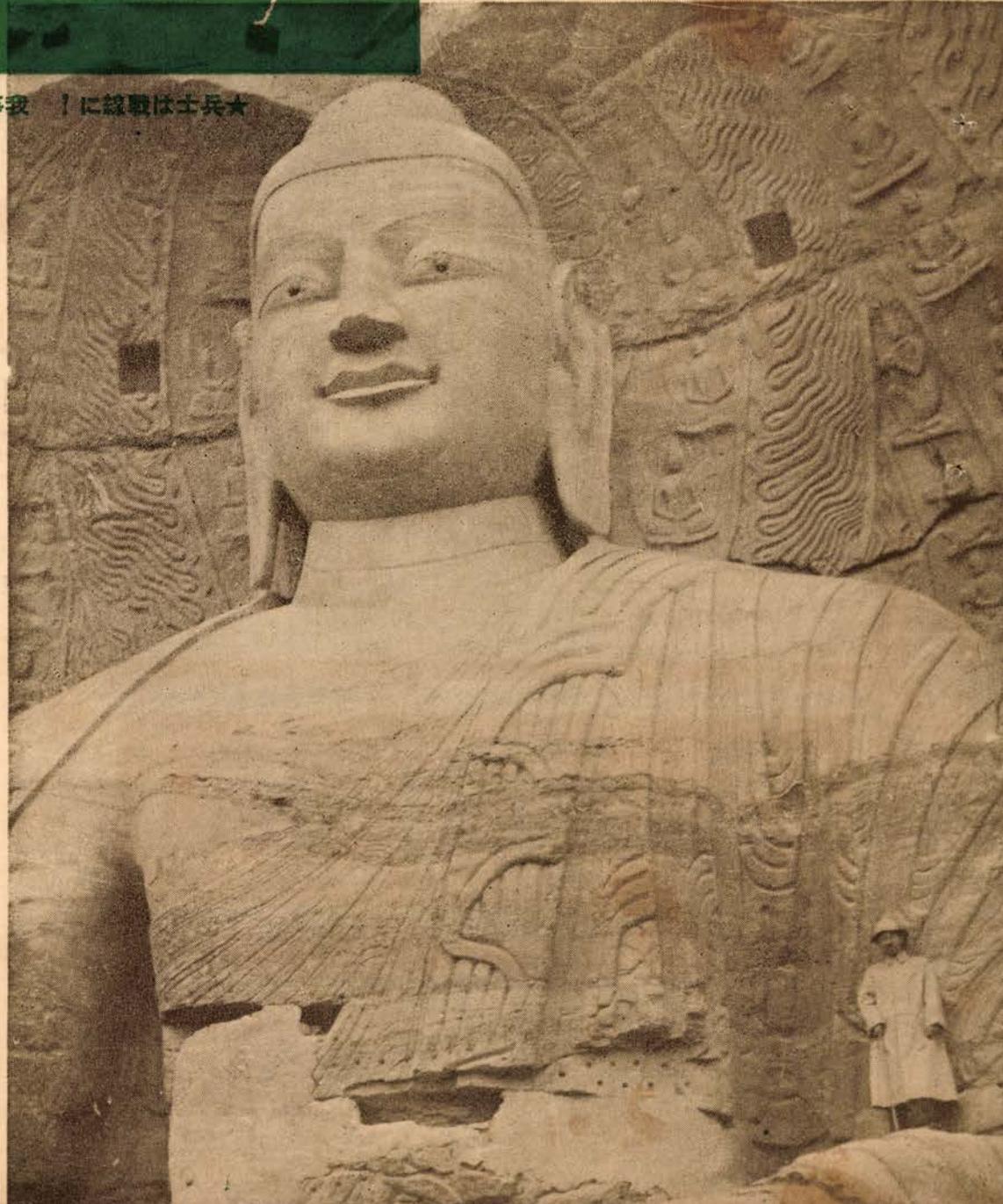
麻生路郎★主宰

誌柳刊月の威權高最
燈識標の強勉生人

本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

正十三年三月三日第三種郵便物認可 昭和十四年六月十五日發行 第十六卷第六號 毎月一週十五日發行

(日動統神特民國) !!に後統は等我 !に線職は士兵大



185

號六第 卷六十第

行發日五十月每

川柳 七月の會

1 日 時
夜 7 (土)

★會場 誓得寺 (電話南四八八六)
市電清水町電停一丁北ノ辻西入

★兼題 「重役」(三句).....麻生路郎選

★選評 (前月會の各題選句中より).....麻生路郎

★柳話.....黒川紫香

★會費 三〇錢 (川協章提示の方は二五錢)

★呈賞 天位(各題)に粗品を贈る

幹事・豆萩・潮花・八九滿・由布・水客・里十九

大阪市西區江戶堀上通二ノ四六(昭和ビル)

川柳雜誌社
電土佐堀三三三三・八一六三・八一六四番

麻生路郎序 石井白面入編

川柳 人の一代
定價拾錢 送料三錢

★人間が生れて死ぬまでのありさまを全國川柳人の句を藉りて表現した句集で、それ等の一句一句が讀者の胸奥に迫まつて川柳なるかなと感嘆させられる好著である。

堺市出島町三五二

發行所 不 朽 洞

振替大阪三〇三九二

★戦線へ銃後へ爆笑を送る快著

本書は本誌に連載され名評釋として好評噴々たりし「川柳評釋百句」及び「川柳名句評釋」の二篇を合纂したるもの、評釋の輕妙さは日本柳壇に於ける著者の獨壇場である敢て薦む

麻生路郎著

新川柳評釋

★四一紙一頁

★定價十八錢

送料六錢 海外他八錢

堺市出島町三五二

發行所 不 朽 洞

振替大阪三〇三九二

アザビール
大日本麦酒株式会社

君と僕
そして
ビール
桜坊

路郎

喜多八で
喰つて兜の
味を知り
仁兵衛

北さくら橋
とんかつ
喜多八

訪隊部守留の士勇柳川

訪問記

夏は初 者は初
夏は初 者は初
夏は初 者は初

川柳勇士の留守部隊に異状のないことを戦線に知らせることは、統帥川柳人の大きな責任だと思ふ。本誌では川柳人協会員酒井美知夫君の留守宅を訪ねた。

南支第一線に悠々として活躍してゐる酒井美知夫君の留守宅は兵庫縣川邊郡稲野村南野にある。阪急線塚口で伊丹線に乘換え、稲野驛下車、御願塚住宅地を通り抜け麥畑の中を西し、北すれば南野である。

「留守部隊の戦線異状なし」を書き続けるため、老記

(右)南支に活躍する酒井美知夫君
(左)愛息篤夫君



に頑丈なところがあつた。村のかゝりで道が二つに岐れた。右すべきか左すべきか判らない。一軒の百姓家に足を入れて美知夫君の家を訊く。

「通夫さんのうちやあつたら」と、わざ／＼戸外に出て、西の方を指さして教へて呉れた。小さな流れに沿ふてすこし行くと、前に廣場のある百姓家に辿りついた。

家は老夫妻がゐられた。老夫は美知夫君そつくりの顔つきだ。あがりさまの長火鉢の横に腰かけて、話し込む。土間には小作米が俵のまゝ積み上げられてゐた。

「わしはもうちよつとも働けんでなア」と股引姿で白い齒を見せられる。しかしどつか

水分の繩をうたがふ汗となり
號令をかけるたんびに汗が落ち
汗を拭く順を互に譲り合ひ
髭つたふ汗はおんなじとこに落ち
言譯をみんな信じてくれる汗
汗かいて軍馬不平のない姿
大汗に譲つてくれる風呂の順
故郷を一氣に語る鼻の汗
バナナの樹に風あり汗を入れるとこ

汗と兵隊

南支 酒井美知夫

が感状を買つたやうなことを云つて來ましたが、なあに大した手柄をした譯であるまいと思つてゐたら部隊長からも同じやうなことを知らして下さつたので、やつてるのんか

いなアと思つてるのんや。東の準備にいたり、第一線に出たりしてゐるそうやが、このころは何も知らして來まへん。」

「社の方へは盛んに、句や手紙が來ますぞ」

「あれは割に筆まめでな。この村の人たちの誰へも二三べんはたよりをしたそうや。川柳の人から貰うた手紙もこんなに澤山ありますわい」とづりキ羅の中から手紙や葉書をつかみ出して見せられる。焼きたてるのも勿體ないから云つて送つて來ましたのや」その中には老記者から出したものもあつた。

「わしは明治三十三年の北清事變の時にも出征しましてな。その時は各國の兵隊だしたので、日本の兵隊は一ヶ師團位なものでした。」

それから、天津や北京の話が出た。記者も最近北支蒙疆へ

川柳雑誌 六月號 目次

表紙寫眞(大同・石佛)……岩崎柳路

川柳勇士の留守部隊訪問記……(一)

一筆啓上……岡田某人……(七)

「百づら」の句について……須原退藏……(七)

金語樓とる山……大西八歩……(一〇)

今も昔も……田邊由布……(一〇)

戀……渡邊曉童……(一〇)

川柳解題と例句……路郎編……(一六)

柳都會は招く……平和亭……(一〇)

武玉川三篇研究……森東魚……(二)

蛭子省二

悼大樓……(三)

大樓さん八景……前田五健……(三)

一錢五厘から……渡邊曉童……(三)

故人追慕……石崎柳石……(三)

先生は生きてゐる……鳥生古弗……(三)

疑はぬ人……長野文庫……(三)

愛媛柳界の母……今川椋影……(三)

片身の一句……由利孝輔……(三)

近作柳柳……麻生路郎選……(四)

川柳塔……諸家……(八)

一 半ズボン……西田紳樂選……(六)

集路馬……石曾根民郎選……(六)

各地柳壇……(四)

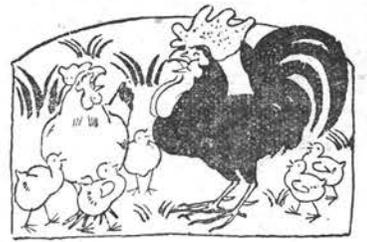
後記(表)……社關係の人々……(表)

柳界展望……(二)

川・協……(二)

「新國劇」を詠む……(一〇)

石井白面人
中島生々庵
戸田孤蓬
上田尚志



武玉川三編研究

(三〇)

梅 本 秋 の 屋
森 子 省 二 魚

(561) ひしり窓をは振ぬ錫杖

省 二 聖窓は局見世などに用ひられ、内の様子がよく見える。局見世などは素通りして行く。(言葉など辭典には「窓をも」として引用してある。)

秋の屋 錫杖を振つて錢を乞ひ歩く法印などが、下等の局見世には立寄らずに行く。

東 魚 俳言集覽に、「紀逸が六玉川にひじり窓をもふらぬ錫杖といふ句あり、思ふに西鶴が書けるものに、ひじりあんどうといふ小巷にさゝやかなる窓をかまへて居る菊女が軒にある行燈をいへり、このすこしの出格子の窓をいふかと嬉遊笑覽に見ゆ」とある。

(562) 高野ひしりを留る大聲

秋の屋 關所の役人が、高野聖を怪しい者と認めて、大聲に呼び留めたのであらう。

東 魚 前説の様な場合であらう。

(563) 世に出る乞食瀧にうたれる

秋の屋 昔は何とかの行者と稱した、乞食が多く来たものであるが、夫れが最初は山籠りをして荒瀧に打たれ、幾年かの修行をする

と云ふのであらう。
東 魚 奇抜な句だと思ふ。「世に出る乞食」は要を得た言ひ廻はしと思ふ。

省 二 十四字で巧みに表現されてある。

(564) 横日淋しく後家の縫物

省 二 横日がさし込み、縫物をして居る後家の姿が、思ひなしか淋しい。

秋の屋 横日は斜陽で、一人縫物をする寡婦の影が、疊に淋しく映るであらう。

東 魚 深くさし込む夕日に縫つてゐる一層の淋しみがある。

(565) 琴のうしろをふせく母親

省 二 琴ひく娘に對し母親の態度を現はしたものの。

秋の屋 後を防くは誇大で、娘の後に附添つてゐるまであると思ふ。

東 魚 同感。

(566) 露の身の浮世へ出ると雨か降

秋の屋 朝露に等しい身は、偶に出世する事があつても、雨天のやうに陰鬱であると云ふの歎。

東 魚 露のやうなはない境界のものだから、さういぢめなくとも、よささうなものだのに、浮世に出れば、雨が降る如く感ぜられる事であると云ふ意であらう。

省 二 露の如き身が世間に出れば、風雨に逢つて苦勞する。(此句の構成は面白い。)

(567) 三代先を婆々の大口

秋の屋 大伊勢屋の三代前の人は、紙屑拾ひであつたなどと、老婆が他人の口を利く。

東 魚 三代も前からの事を知つてゐると自慢げに話をする。前解のやうな場合も考へられる。

省 二 三代先の事を、この年になつても、婆さんが自慢らしく語る。

秋の屋 東京人は猥談をするのを、大口を利くと云ふけれ共、自慢話を大口とは云はない。

省 二 兎も角、辭典を檢すると、大口は自慢ばなし。又は猥褻なる話とある。

(568) 草分の思案のもとの祭り前

省 二 私には判然とせぬが、祭禮の負擔に關する思案で、思案するのは負擔の少ない方の爲めであらうが、それが「もどる」のだから奮發する事に決意出來たのか。

秋の屋 江戸の草分町人には、富豪が多かつた故、祭禮の費用を多分に負擔した、されば祭禮の前には、一思案せずばなるまいが、「もどる」といふのが判らぬ。

東 魚 前句で「もどる」一心持ちが分るのであらうが、どうも判明せぬ。消極的にしやうといふのか。イヤ／＼外の事でない祭りだから、矢張り一番奮發せねばなるまいと思ふのか、不分明である。恐らく奮發する方に考へを懸すと云ふのであらう。

(569) あぶない茶屋へ蓮の實か飛ぶ

省 二 不忍池畔の出合茶屋。「蓮掘りに氣を通しやれと茶屋はいひ」。

秋の屋 此處へ蓮の實を飛ばした、作者の手腕は凡でないと思ふ。

東 魚 氣のきいた云ひ方である。

(570) 百稻荷すむ小野の古道

秋の屋 百稻荷とは、春秋の彼岸七日中に、稻荷の百社を巡拜すること。「小野の古道」は名所でなく、野邊の古道のことである。

東 魚 百社参りも、百社目に近く段々邊鄙な小社を廻らねばならぬ様になる。趣がうかゞはれる。

省 二 お稻荷様だけに、「小野の古道」は好い。百社参千社参の句「息子の千社黒助がしまひなり」「息子連れ田町が九十九社目なり」

(571) 連添ふた元の起は書はる

秋の屋 抑馴れ初めの秘事は、耻かしくて筆にも書けない。然し坐五の「書はる」は字足らずで聞苦しい。

東 魚 原本「はる」の様にも見えるが、矢張り「はる」であらう。「はる」嵩が大きくて手にあまる意かと思ふ。轉じて書き難い意にとつてよろしからう。「互に笑ふそも／＼の文」の方が巧い。

省 二 「書はる」は、書きはばつたしで、書きはるかと、思つてみた。

(572) 中間の綻を縫ふ衣かえ

省 二 綻を縫つて衣更とは、中間らしくて面白し。

秋の屋 針を持つ手も覺束ない。

東 魚 いざ着やうと思ふと、綻びに氣が付いた處が、女氣のない趣が分つて面白い。

(573) 雙六も灯の来る内の燭まくら

省 二 灯のくるうち、假枕で雙六も一ト休み。

秋の屋 雙六もの「も」の字に難がある。

東 魚 浮世繪の趣がある。
(574) 眞木も家老も御國から着ク
東 魚 家老とあるから大名と思はれる。

重大なものと、つまらぬものを対照させた處が、ヤマなのであらう。

省 二(574)の、烏帽子折とセンペイの對照よりもウンと奇抜。實際に眞木を取寄せた事などはあつたと思ふ。

秋の屋 大名であらう。
(575) 思案極て辻駕を呼ぶ
秋の屋 赤蜻蛉と共に、北方に向つて飛ぶ。

東 魚 雨やどりの場合とも考えられさうであるが、前解の方が面白いであらう。

省 二 北國行の句として、反對の場合は『煮え切らぬ奴らと四手あざ笑ひ』。

(576) 會に憎いものはふり袖
省 二 主觀だ。憎いと云へば憎い。憎くないと言へばさうも思はれる。前句事情ならむ。

秋の屋 淨瑠璃の「戻り駕」では、振袖姿の禿が四手駕籠に乗る。娘が廓へ身を賣る時など四手に乗る事もあらう。

東 魚 芝居見物の娘なども乗る場合があるのではないか。

(577) 付木遣ひのあらい勘當
省 二 なぜだらう。
秋の屋 附木遣が荒い故に勘當するのでは

なく、萬事不經濟な事をするの意であらう。然しそのみで勘當とは、少し苛酷のやうである。

東 魚 今から出てゆけといふ腹立ちの餘りに、行燈へ灯を入れやうとする附木遣ひも荒くなる。と云ふ場面ではないかと考へる。

明方暗いうちにコソコソ息子が歸つて来た場合などが想像せられるが如何であらうか。

省 二 お説御尤。それで理解し得る。
(578) ふいこ祭りに消へる鍛冶の火

秋の屋 鍛冶が一日休業する故、工場の火も消えるのである。

東 魚 連日盛に火が燃え騒音をたてゝゐたのに引かへ、輪祭の一日の土間のひそやかな趣がうけとれる。

省 二 吹革を用ふる職業の人々が、十一月八日稻荷神を祭り休業。子供を集め蜜柑まきなどとする。『明残る吹革祭の炭火かな』(成美) 對照して面白し。

(579) 琵琶の聞人を持たぬ四阿

秋の屋 四阿のやうな處では、琵琶を弾いても、聞人は有るまい。立聞をする人もなからう。

東 魚 二と云ふ反面に、一人淋しく琵琶を弄してゐる奥床しさがある。

省 二 やはり聞人があつてこそ興ならむに。淋しい事ではあらう。

(580) ひつんだ家を譽る築しま
省 二 埋立新開地の家を譽めるのだから

仲々苦しい。風通しは良い事でせうなどと。秋の屋 古川柳の『根津の客家のひずみに口がすぎ』の反對である。

東 魚 二つに建てた家が、却て趣があるのを賞すると云ふのであらう。

(581) 恥しめられて寝入るものけ
省 二 物怪が憑いて、色々口走るのを恥しめつゝ寝入らせる。

秋の屋 狐憑病者などが問答に負けて、遂に寝入つたので、頓て病は全癒するであらう。

東 魚 二「恥しめられ」が、手厳しく聞えて、病も全快しさうに思はれる。

(582) 刺る氣で打か夜半の柴の戸
秋の屋 一念發起して出家する氣となり、夜半に僧庵の戸を叩くのである。

東 魚 前説通り。「打か」は原本盤の變體と思ふ。「打は」と讀めるやうに思はれる。

省 二 「は」でありませう。
(583) 赤穂へ送る狂歌案しる

秋の屋 四十七士中の一人であらうが、和歌でも俳句でもなく、狂歌としたのがヤマと思ふ。

東 魚 同感。
省 二 狂歌の方が、裏面に意味を持つから。

(584) 床へ居つて直す寝みたれ
省 二 寝亂れた姿を、床上で整へ直す。

秋の屋 女子の動作で、實際の句である。

東 魚 二「床へ居つて」が、實際をつかんでゐる。

(585) 勘當させた人も勘當
省 二 罪は相互にある、剖面。

秋の屋 若主人を誘惑した番頭なども同罪。
東 魚 笑止の至りである。

武玉川研究(五月號)正誤

頁	段	行	誤	正
四	三	二六	鑄	鍍
四	四	三九	名所圖解	圖會
五	二	一九	雷文才	等
五	三	一	朱大盃	朱の大盃
五	三	一六	ひやうたんと	を
五	三	二二	七十一歌合	七十一番



松坂俱樂部

あらゆる趣味のお稽古場

手はごきから奥義まで
氣軽く、楽しく、御上達

會員募集

川柳講座

川柳雜誌主幹

麻生路郎先生
擔當

御申込

七階松坂俱樂部
電話(代表)三〇〇三番

松坂屋

大阪日橋

お稽古
種目

長常磐
津元唄
尺八曲

能樂小鼓
舞尺八曲

茶書道
本畫道

華料道
洋裁道

棋氣道
松坂レコード

吹込

柳句

吹込

吹込



七曲り八曲りなるハイキング 同
洗濯を氣にして妻は病み續け 同
軍犬で月に四五度詫び廻り 上野縣 佐二木千隈
二次會で帽子と靴の雲がくれ 同
お目見得の犬にもなれてここはられ 同
五十にも近い番頭の公休日 同
迎ひ酒さても汝の酒癖よ 愛媛縣 門田雨城
迎ひ酒八百屋一盃強いられる 同
霧來り霧去り山の宿うれし 同
まだ若いく敵にしてくれず 同
港の灯見えなくなつた寝るこせう 下關 櫻川不水
動かないクレイン六甲夕焼ける 同
學堂も老るたり白髮幾種 同
齒磨粉蜘蛛巢作りに忙しい 同
春の汽車八達嶺をのほりゆく 張家口 小川靜觀堂
抗日支那の運命
逃けて來る鹿を見据える獅子と鷲 同
二ア人は肥料溜遠くまはり道 同
蒙古風今日の日曜を吹きまくり 同
病友、S.O. 逝く
佛は暎の中に生きてゐる 讀島縣 西野みづほ
娘十六吉屋信子を積重ね 竹原町
利子のゐる金に觸れない老となり 同
草餅へ春の野を嗅ぐ藥粧 同
不具者の唄一句 同
あばたなる故にや罪もなき左遷 朝鮮 姜 弘龍
慰問文村の自慢の杏書き 同
當選の父の名がよし人たかり 同
巡迴野外映畫を見る
風は春映畫は雪の富士うつす 兵庫縣 北川春巢
左右から幹事の耳を借りに來る 同
花の驛からの出勤羨まれ 同
表彰されに土砂降りを出る 同
人を焼く煙りでしょうは他人の目 下關 多田市多樓
紙屑屋おれより財布重そうだ 同
悪友の妹やつぱり美しい 同
米の飯喰へるに銃後何を言ふ 愛媛縣 大洲町 上甲可洲

病院ではや二ヶ月の米を研ぎ 同
あまいな手へ先生は指してゐる 同
蛙鳴く郊外家の數がふえ 尼崎 奥田緑水
作業服唄うて歩るく五月晴 同
ボート軽くゆらく足ばする 同
算盤を持ては給仕に劣るなり 今治 長野文庫
立身が故郷では出來ぬ様思ひ 同
その親は偏痛ならん兒の名前 同
通勤の見榮は讀まない本をもち 小石川縣 勝山しとし
左様なら濟んで部屋掃く音となり 同
手を伸ばせ臍が出て來るマステーム 同
これ捕虜よ支那の魂見せて見よ 佐世保 坂本遠見路
何もかも捨て、命をまだ捨てず 同
ホームシツク嘲笑ふ男が羨まし 同
債券も買はず銃後の街に住み 大阪 夷 一笑
出目金が一匹死で水をかへ 同
麥の穂もねぎの坊主もせいくらべ 同
暴力になつて女はさからはず 大阪 富岡巨人
子を連れて行けばラッシュで乗遅れ 同
女連れしやべり續けて乗過し 同
妹の死は知らぬなり軍事便 讀島縣 杉原愛鳩
義理があるとは知らぬ人の口 竹原町
軍事便無沙汰済まぬはこちらなり 同
隊長は部下の訛りに故郷を問ひ 大阪 山川富士
無蓋車に乗せて貰ふた慰問團 同
お茶冷えた頃に女中の飯さなり 同
落書に似る筆蹟を大事がり 尼崎 飯尾寄與史
食道樂さうくフグに負けはつた 同
時局萬歳紋付が邪魔になり 同
あの月はこれから支那で見る月か 大阪 津路紅多呂
ハイキングコースをそれた晝の酒 同
赤信號煙草の灰を落しきき 同
要領丈覺えて官吏十五年 金朝縣 弘津柳慶
歐洲がやればいゝ、こは利己的か 同
陣中に早慶戦のある餘裕 同
エプロンを外して出れば押賣や 平壤 小島鰯洞

饒舌てる客へかまはぬラヂオかけ 同
面會へ他人行儀の妻の顔 同
出て行けが一人寂しい膳につき 廣島 近藤須彌浩
茶柱が立つて番茶を呑み惜しみ 同
躍進の港へビルがまた一つ 下關 岩崎勇記
恵まれぬ子俺に任してくれさいふ 同
母の手に體温計が震るへてる 下關 國弘半休
榮轉の度に學校變らされた 大阪府 大島石艸
病床へ物價騰貴が迫つて來 同
寝てみたい遊んでみたい時がやま 同
耳打ちの兩手は肩にからんでる 廣島縣 梶川芳郎
お出ましの化粧を笑ふ女中部屋 竹原町
交叉點巡査の聲が追つてくる 廣島 河合白外郎
只今の聲が大きい一年生 同
父なしの愛國心で育てたり 尼崎 江口正次
聖戦は一戦だけでない時局 同
二階から呼んで豆腐屋まごつかせ 大阪 古寺謙南坊
漬物を食べる音から皆達者 同
感激の口調從軍記者の辨 今治 田窪石鐵
バルブ全開船は全速力でゆく 同
二つ星眺めず逝きし祖母なりし 尼崎 小林文月
酒の力かうまくゆきたり 同
順調のたるみを悪魔見逃がさず 大阪 堀毛一龜
夕焼へ今日の感謝を持ちつゝけ 同
葉櫻を縫ふて御堂へ手を合せ 京都 福田丁路
目を閉じて思ふ事なき湯の加減 同
靈柩車花の盛りをぬけて來る 大阪 吉田湊万
大工場鐵の不足と思われず 同
強かつた父は興亞の人ばしら 堺 野島夢女
機密費を出して社長の人情味 同
口紅を一寸氣にして茶を運び 下關 石津流星
繪日傘を廻して歩くバックシヤン 大阪 駒井昌坊
銃聲を幻で聞く熱の中 岡山 尾崎綠柳
椰子の實と妻に見せたい髭のあこ 南支 池本種吉
絶間なき疵健やかな男の子 大阪 淺 九堂
計算が合つて喜ぶ商大出 大阪 鈴木義郎
信仰の力父親導かれ 堺 野島神榮



ジへの文雜と究研

『百づら』の句について

頼原退藏

武玉川三篇の句「鳥甲着たる人の百づら」について諸説があつたが、「百づら」は東魚氏説の如く百文程の安つほい顔の意だと思ふ。この語は江戸時代のごく初期から見え、まづ『醒睡笑八』に

伊勢の桑名に古諫とて醫者あり、天然と顔くせあしし、濃州立政寺より文叔といふ僧下向し、毎座對談し、後本山に歸る時人問ふ、桑名にて古諫をばなにとか取沙汰する。されば桑名はつらのやすい處やらん、古諫を百づらといふ、美濃でならばやすくと三百はせんものを。

こある。これと言葉の語源的な意も、又安い顔は妙な盛み面をさして居るこも分

きになす小びたいや。(院本、山椒太夫戀慕、四) 「くすむ」こいふのも、しかめ面である。達摩忌だから澁面の坊主が似合ふ。百面に些かましなのが二百面であらう——勿論これは一時の造語であるが。

語義は以上の諸例で十分明かだと思ふが、句意はやはり鳥甲を着て舞ふ伶人なごに、ロクな顔をしたのがないのと言つたのであらう。一體鳥甲の句は武玉川にかなり多く見える。今見當つただけあける

鳥甲見て歸る弟子入 (初篇) 舞に來て思ひの外の鳥甲 (四篇) 住よしへ風呂敷かけて鳥甲 (五篇) 高々と傘さして行鳥兜 (六篇) 能々な事か質屋に鳥甲 (十篇) 八重葎折々見る鳥甲 (十一篇)

等がある。中には句意のはつきりしないものもあり、特に十一篇の句などは植物の鳥甲とも思はれず、さういふ場合か明かでない。

生垣の上へよき鳥兜 (童的、初篇) も一寸同巧の句らしい。諫鼓岩深き野に咲鳥兜 (俳諧、二十三)

これは勿論植物の方である。鳥甲の諸句については、なほ諸家の高見を聞きたい。

一筆啓上

岡田某人

郵便と云ふ便利なものがあつ

て、零細な費用と簡単な手間で遠い所の人達と近況を知らせ合つたり、要用を達したり、考へてみるとまことに有難いことではある。處が小生どう云ふものかこいつが苦手なので困る。費用とか手間とかは勿論問題ではないのだが、問題となるのは中味、と申して便箋のことではない、その上に書きつける文章なのだ。

拜啓から始つて頼首に終るその間が、どう考へてみても重荷でならないのである。勿論要用は仕方がないとして、それ以外の、御無沙汰のお詫びや、皆々様御無事の由や、當方の安否、など、じっくり考へてみると誠に空々しい文字ばかりに考へられてならないではないか。所が又ひるがへつてみるに、どうしてもそんな文字を並べないといふ

ものが概念が出来上つてしまつてゐるから、いきなり用事へかぶりつゝの如何かと、あれこれ案じる、それが氣に染まぬのである。

ハガキで、「一緒に吞まうや、明日ひるから來い」とか、「金を五十圓ばかり借りたい」とか催促なら、「あの金返せ」とだけ書いてそれで受取つた方も何とも思はなげや、大變たすかるんだが。第一ハガキが今の三分の一の大きさでよくなり、パルプの節約にもなる。そしてそれに對する返事も、「お前と吞むのは嫌だからことわる」とか、「此方が借りた位のものも」とか、「まだ少し」でよろしいではないか。それを、まづ御機嫌をうかがつた後、尋ねられもしない自分の家の女房子供の健康状態まで引合に出したのちおづ／＼と用にかゝり、おまけに皆々様によろしくと、宣傳文までかゝけて出すと、受取つた方も受取つた方で、ありもしない用事や病氣を作つたり、時によると親兄弟を病氣にしたりする不孝不友まで犯して、じっくりやんわりことわつて來る。そしてこれ又負けずおとらず、皆々様御身御大切になどと醫者みたいな事を、附録まで發行して來る。しちめんどくさいつちやないではないか。そんな空々しさ

が、猛烈に僕の氣に入らんのである。

それから又、「先日は參上、御迷惑を相掛けましたことや、御歡待に與り一有難かつたことの御禮。これは一寸上面だけ考へると大いに念の足つたことの様で、實は譯の分らない手紙なのである。第一御迷惑をかけて恐縮する位なら始めから「お邪魔」になど上らない方がはつきりしてゐるし、歡待の御禮は、そこ

の支關で靴を履く前後に、自分でもうんざりする程申し上げた筈ではないか。あ、それなのに、何も重要資源を消費し、お上の手数をわづらはさなくてはならぬとは……である。

そんなことを本氣で實行したら、手紙やハガキなんてものゝ必要が殆んどなくなるぢやないか、と仰言ることせうが、それに對する僕の答へは、「それでよろしい」と申し上げる外はない。若しそうなら、友情はどうなる、親愛に於て疎遠になりはしないか、とは次の質問であらうが、決してそんなことはないと思つていゝ。若し、用事もないのに手紙の往復をしてゐなくては保てない様な友情や親愛なら、本當のものではない。いや、むしろ、そんな多分に形式的なものでそれらの尊いものが保てる、保たねばいけないなどと思つてゐるそのこと自身が、實に水臭いものではないか。そしてそれ等の人々は、生涯「御無沙汰の甘味」といふものを知らずに済ましてしまふ、いはゞお氣の毒な方々である。(二〇頁へ續く)

典雅な日本座敷

北理京 白蘭

土佐堀船町



川柳塔

大阪橋本緑雨

泣きやまぬ子をば膝からさられたり

迷ひ子を抱き上げて来る人の渦

集金がよらぬミ丁雅ニユース館

ネオンの灯先生だけは貸浴衣

出征に山も眺めて淋しそう

飯櫃を二人でゆづり合つて喰ひ

大阪高橋かほる

朝のバスひつくり返りさうに行く

近眼の頬がふくれるシヤボン玉

ボート屋は今日のラムネ云ふて出し

慰問袋やつぱり馬の餌は止め

横濱 福田山兩樓

郷里に中風の父を見舞ひて

訪ねれば父よろこべり山櫻

わが生れし國はよからうこ父は言ふ

長男高松高商に入學

學園も寮も櫻の盛りにて

最近の心境

神佛に祈る言葉に順があり

この丘の富士を見飽かず春霞

進水式見物に浦賀に赴く

島、山はベルリがやつて來た姿

大阪奥村丹路

惚れきつていつそ涼しき女の眼
出世してなかく會えぬ友をもち

たごふれば春より秋の花に似る

夏ちかし靴のほこりに眼をおさし

乗つてから人相わるき運轉手

赤ん坊の重みたのしむ日のあらた

張家口 岩崎柳路

鯛の鯛今日は私しの誕生日

お見それを致しましたさ仲居てれ

蒙疆に女も殖えて自治政府

春風の旗も奥地へ宣撫班

繪葉書の上海だよりへ猫さ居る

集配人ポストの鍵も朝の音

兵庫縣 寺井鋭々

床の軸ほめて借金頼む也

洋服屋肩から尺をもう外し

土砂降りの中に夕刊賣れ残り

紅茶は空ら夕刊も見たがまだ待たせ

跛行景氣家に入らぬ椅子も買ひ

産業戦士油まみれを羨まれ

大阪 大西八歩

うちの子がいつち繪本の顔に似る

阿蘇の如く我れ寝そべつて煙草吸ふ

バスガール賣地の事も云ひそへる

父さなり子さなり今日の赤だすき

妻だ子だ清算をして建設だ

戎橋根城にかせぐのも樂し

本家本家元祖元祖土産物

壹圓であれば賣れない銀狐

指輪に耳輪、牛は鼻輪をはめてゐる

趣味の程度もタイにボタンか

○

ひさりのむ酒に亡き友なごおもひ

兵庫縣 水谷鮎美

よき父のこゝろよ白湯にあまんぢる

春雷の椿の花をゆるがせり

漂流記ナイフは錆るひまもなし

水は流れて音さなりゆく

大阪 姫田夕鐘

旋盤工札の重みでかへるなり

木の芽だちすんでに處女でないのなり

ノ一財布お腹が空いて來るばかり

南支 市場没食子

姑娘が三人混ぜる宣撫班

宣撫治療ヨハネ馬太傳等思ひ

一線へ寫眞屋夫婦來て儲け

自給自足炭焼くすべも覺えたり

酒保へくゞの如くに押寄せる

婚典樂だんがさ炊事茄子を切り

春泥にすべらじさ行く擔架兵

ショウキ髭バナ、の前に立つて撮り

仲麻呂をつくゞ思ふい、月夜

大阪 須崎豆秋

愛犬の死

犬殺されて拙い味噌汁

鑑札がなんのへちまにもならず

恐れ入りながら犬の死を届け

天國へトボく行くか尾を垂れて

うちの犬だけが鳴かない夜さなり

人間に生れて來いさ祈るのみ

一七日

天王寺犬を弔ふ鐘も鳴り

南支 宮岡白峯

戦利品大阪製の貨物汽車

殘敵の骨飛び越へて春を行く

日誌帳佛の數も赤で書き

便箋紙銃後はつかれきる姿

兒こ牛こ祖母あり逃けた支那の街

松本 石曾根民郎

運命はおほきな月のかけにある

母、丹毒となる

死ぬこに觸れずみこりの老父の手

夫婦はこれよみこりの父います

全快に梳るこ忘れしか

絶望を越へて星空仰け母

今治 鳥生 古弗

あやまちはみんな若氣にしてしまひ

親だ子だ家庭はいつちい、こころ

決心は過去の歴史を夢にする

故 大樓先生へ

春は去る佛間にゆる、灯も悲し

晴天よつ、け浄土へ五月旅

大阪 正本 水客

金の要らめ話へ義憤感じたり

着飾つて絆綜膏を少さくはり

い、借家裏に木の芽の葉が青い

落日の身一人で借家探しに出

吹飛んだ様に雀は風へ降り

豊中 黒川 紫香

満員車隣ボロそうな話なり

相談にのりそう膝が動くなり

虫眼鏡近くの蠅が追はれてる

ステッキでくればかまきり身構へる

大阪 丸尾 潮花

陸軍病院に春坊を訪ふ

出征のある日を思ひあふふたり

たのもししい人の煙草の輪を見詰め

あの頃のふたりを思ふダムの風

いつわらぬ姿植木に水をやり

大阪 岩橋 双虎

ガスタンク晴れた住節へ満腹だ

歡送の旗風をきる進軍歌

兄ちやんこ呼ばれ信用まだされず

戦傷であればこそ思ふ松葉杖

大阪 岡田 某人

辛辣に過ぎたり洒落へ笑ひ足し

祝杯へ酔ひつづれたをよろこばれ

九時に寝て現状維持派夢も見ず

極道の青葉のひるを眩しがり

鴉そも旅情の耳こ知つたるか

獨り身のズボンの筋を大事がり

さの嘘もみんな信じてよく眠り

もうそんな嘘をつく子へ父歸る

邪魔くさ相にひまな薬局

兵庫縣 田邊 由布

鼻毛をば抜き、遊ぶブラン出来

人生の峠薬草なご求め

チョッピリ支那の味知る豚饅頭

勤勞のそのモンペイにある愉快

尼崎 酒井 斗風

想ひ出は妻に秘めたるま、忘れ

鍵穴をさがす背中に妻の呼吸

叱るこ嫌らひな僕を子は恐れ

郷愁の渚燈台見てるたり

粧ひも淋し叔母さま末亡人

信念はまけず孤立の三十すぎ

○

兵庫縣 長崎 柳秀

南無浄土親の隣は俺が行く

松の影遍路の親子足をのし

デパートで元の旦那を擦れ違ひ

煎茶器をそろへて隠居胃が悪い

おもちや箱あいたは母の乳房へ來

金婚の祝奇蹟に美まれ

風車今一呼吸を母が足し

廣島 濱田 久米雄

鉢植の講釋をして大家去に

挨拶の原稿書いて幹事寝る

新緑を越え新緑の故郷へ着き

街角で小さな貸しを強ひられる

大樓氏を悼む二句

廣島の句會が最後は淋し

温容は跡なし春が夏なる

今治 渡邊 曉童

蝶を逐ふ子の手の指が悪魔に似

だしぬけに馬車に出合ふた除行標

諸車除行カーブをする海に添ひ

看護つかれへ春曉なる

愛媛大洲 今川 椋影

氣まぐれの易はフンと言つただけ

私語は蟹の泡にも似たる哉

燈管制飛行機飛んで來て嬉し

神戸 潮田 明坊

青二才は胸の中法學士

餘裕なき母になかつたま、逝かせ

節よりも熱で唄つて兵送る

春惜しむ酒、酒、酒、春惜しむ

萬歳の渦に答へた舉手で征き

ハワイ 高澤 一浪

女ですお喋り負けをしませんよ

人間の弱さを戀が笑ひます

札東だ皆んな御油断めさるなよ

浪だパンだ處女の誇が莫迦だつた

第二世カナカバケの血も流れ

(七頁の續)

何君にも永いこと御無沙汰だが、どうしてゐるだらうか、一度手紙でも書かうかな、だが何と書いたものだらう。當方無事何も知らせる事もない。君はどうしてゐる。月並だな。まあ、何か變つた事でもあるまでは止して置かう。——そんな時、何の何君は、こちらの中にまざくゝとある。それだけでいゝではないか。何も文字といふ厄介な媒介を用ひる要はあるまい。と同時に、この一種の負債感が却つて、先方への思慕をV I V I Dに、しかも何とも云へない

甘美な氣分をさへ加へて、永續させる力あるに於ておやではないか。

ましていわんや、御接待の好意を一片の外交辭令を以て帳消しにしようなんて。

あゝ世の人々よ、と僕は云ひたい、よろしく御無沙汰を愛したまへ。手紙など書いて、積る想ひを消す勿れ。だが、……。

前線慰問と、それから戀文とはこの限りではないのである。

舊友のひよつくりと來て去らざり

戀

渡邊曉童

看護婦に戀した青年がわざと傷を作つて病院に通つてゐた。看護婦が眼科へ移つたので又眼をいためて其の病院へ通つてゐるうちに其の女が小兒科へかわつたので他家の子供を借りて行つたが歸りに其の女から「奥さんに宜敷しく」と言はれ其の戀も悲しい終局と成つたといふのを讀んだ事がある。別に僕は看護婦に戀を感じた譯ではないが此の頃を毎朝病院へ通つてゐる。曉美が先日馬車にひつか

つて一寸した裂傷を受けたので出勤前を病院の空気にひたつてゐる。僕のやうに醫者や病院に縁のうすいものには此れも變つた人生勉強が出来る。良く成るにつれて此の二人の若い親子は活動でも見る様な調子で病院へ出掛ける。内科の病人と外科の病人は大分此の朗らかさ加減の違ふといふ様な事も感じられる。がしかしそれにしても高い入場料ではある。此れで獨身で看護婦に戀を感じる様だと又變つた味があらう等と考へてゐる。いやしかしそれだとすると曉美といふ者が生れてゐる筈が

都會は招く

平和亭

越後からそして信州から出て來て天下のレコードファンを熱狂させた勝太郎に市丸。佐渡へ佐渡へと草木はなびくか知れないが世の人氣者にならうと思へば東京へ大阪へと進出しなければならぬ現實はあらゆる方面に見出される。



一人の人氣者には多數の旗持や提灯持が生れてくる。提灯の灯に氣を取られてゐるうちは無事だが、自分や會社の宣傳に使ひだすと利用せられた者はそろ／＼尻込みをしてくる。うっかりしてゐると煮出しの雑魚同様だしがらにされて捨てられる心配があるからだ。



新國劇を詠む

歌舞伎座にて

第一 日本の合奏

石井白面人

ものたらぬことは女が無口なり
お馴染の洒落へすかさず仲居洒落れ
握手して乗る足許を危ながら
船頭の外ははしやぎ切つて乗り
うたひ出すときは揃はぬ軍歌なり
戦功を云はず白衣は笑ふだけ
前線の余裕將棋をさしてゐる
心眼は澄んで音色に人を知り

中島生々庵

にはかめしい險の中の合奏や
その他大勢尺八を口にあてた丈

戸田孤蓬

出征と同んなじ歌で母は待ち
白骨へ月見をさせる母と兄

上田耕二

打ちあけてみれば母親知つて居り

上田尙志

報國の誠に生きる惡の華

第二 齋藤大使

中島生々庵

につこりと太平洋の人柱

憂國の大使マイクに富士を見る
宣傳の下手が却つて信じられ
これほどの忠義本人知らずに死に
幕間のマイクも金を賣れと云ふ
(幕間)

石井白面人

上田耕二

父ちやんの帽子坊やに大き過ぎ

第三 越後獅子祭

中島生々庵

駈引を割つて仕舞へば怨と怨
恐いもの見たさが増える敵討
見て貰ふとんぼ返りは泣いた藝
浪人の愚痴は大小もてあまし
衣食住足つて子供が欲しくなり
親のない子のない二人うまが合ひ
とんぼ返り泣いたあの日が蘇へり

石井白面人

木登りも故郷を見たい子の願ひ
角兵衛へ遠い憶ひは蒼い咳

戸田孤蓬

返へり討殺されもせず世にひがみ
二々昔思ひ出したる聲となり

上田耕二

衣食足り捨てた子供を思ひ出し

上田尙志

今も昔も——變らぬ話。

「今も昔も」と云つてもヒエ業の廣告ぢやない。
昔の殿さんも今の顯官も、下民や大衆のことはなかく／＼ピツタリと來ないらしい。
昔の話に——殿さんの姫が、一貧乏人／＼と云つても千兩兩の一つや二つは持つてゐるであらう。」と曰はせられたと云ふ。

今の話に——ある大臣が女中さんに啓發されてス・フの改善對策をやると云ふ。
今も昔も——變らぬ話。

(十四、六、五)



協・川

★國都川柳集團の結成

大島瀧明君(川協名譽會員)の新京進出の實現を機として、滿洲國新京に、安井八翠坊君、大島瀧明君を顧問とする國都川柳集團が結成され、全滿洲の柳人へよびかけることとなつた。機關誌としてはきりん吟社の「きりん」を繼承六月號より華々しく刊行される由。同集團事務所が新京特別市建和胡同二〇四號上倉泥柳君方に設置された。

★仁川物故柳人追善句會

池田可宵君(川協名譽會員)は六月一日仁川府の西本願寺に於て仁川物故柳人七人の追善句會を開催、仁川川柳社より多數の柳人が參列された由。七つの靈のうちには會て朝鮮柳壇のため寢食を忘れて盡瘁した川柳雜誌社仁川支部幹事故故矢田冷刀君のゐることを忘れてはならない。今後物故川柳人追善句會を仁川の年中行事とされるやう、仁川川柳人に切望する。

★河井理事川柳葬

▼既報の如く急性肺炎のため日本赤十字松山支部病院に入院加療中であつた酒井大樓君(川協理事)は藥石効なく遂に五月十八日午後十時半、家人、柳友等にとられながら逝去された。享年五十一、葬儀は川柳伊豫主催の下に川柳葬とし十九日午後四時自宅で告別式を執行された▼酒井大樓理事逝去のため後任理事として松山市南柳井町五九矢野蛇之麿君が推薦され就任されることとなつた。

消 息

柳 界 展 望

全國川柳界の各地川柳人の一舉手一投足を此展覧会ですぐわかる様にしたい特種の御通信を歓迎する(馬)

▼山本葉光君(川協會員)は日本一蘭王として知られてゐる吉田安正翁の金婚式記念句集を刊行された。募集句の川柳は須崎豆秋君の選、俳句は山本葉光君の選である。

催

▼五月七日、廿一日午後一時松坂俱樂部川柳講座▼廿一日午後五時同講座有志の歌舞伎座鑑賞句會▼十六日、廿三日夜有恒川柳會▼十八日夜、川柳雜誌社五月例會を誓得寺に於て開催▼廿五日夕飯大川柳會▼廿七日午後一時鐵道病院川柳會以上何れも路郎出席▼故酒井大樓君の通夜川柳會五

月十九日は松山、今治、大洲の柳人諸君によつて營まれた。▼大洲川柳家諸君は五月廿六日故酒井大樓君追悼句會を孝輔居に於て營まれた。▼大阪鈍足會は創立十八周年の記念として六月四日潮花居に於て川柳大會を開かれた。▼川維廣島支部五月例會は十九日廣鐵俱樂部で開催された。▼川維下關支部は五月廿六日に五月例會を開催。▼このみ川柳會は六月二日例會を中道本通の八坂神社事務所で開催された。

る視力減退とかにて當分讀書はゆるされないらしい。▼橋本綠雨君(不朽洞會員)は五月十一日大峰山へ登山。▼米澤曉明君(愛媛大洲)は六月四日大山祇神社へ參拜され文庫君宅にて曉童君等と柳談に一夜を過ぎされた。▼森半疊君(大阪)は新町の佛教會館で「てのひら療治」の講習を受けられ、同僚達と共に、六月三日熱海、伊東方面へおもむかれ坪内逍遙博士のお墓へ參られた由。

▼野田昇玉君(廣島)は十ヶ月間倉敷中央病院へ入院されてゐたが二人のお子達を残して六月四日永眠された。哀悼。▼正本水客君は大阪市住吉區湯里町四九五▼尾崎絲柳君は岡山日赤病院新館三階十號室へ▼石井白面人君は大阪市住吉區墨江西四丁目四〇番地へ▼大森千代香君は岡山陸軍分院二病棟一號室へ▼栗原空栗君は大阪市住吉區山坂町五丁目十九番地へ

改 號 社 告 浅野李葉君(大阪)は李介 本社松山支部幹事酒井大樓君の 永眠により後任幹事を左の通り 決定いたしました。 松山支部幹事 矢野蛇之麿君

書き一奇に 全国便箋

養先の城崎から歸宅されたさうであるが今猶静養されてゐる由▼河野夜王君(大阪)は六月二十七日日赤眼科山本醫長の診察を受けられたところ動脈出血によ

▼松永幸葉君(川維港支部會員)は應召、〇〇部隊へ入隊された▼多田一波君(大阪)は日出度華燭の典を挙げられ、樂しき新家庭を作つてゐられる。▼酒井斗風君(不朽洞會員)は腹膜炎に罹られ五月卅日尼崎中馬病院へ入院されたが経過良好。近く退院の由。▼陸軍病院へ入院中の大森千代香、石浦征野、掛飛吉宣の三君は六月一日國立公園鷺羽山に靜養の一日を過ぎられた。▼戸倉普天君(兵庫縣)は病氣療

パーマネットは ナショナル 大阪・心齋橋筋周防町角 山口倫子 經營・電南 992



悼大樓



公德院柳譽大樓居士

大樓さん八景

前田 五 健

1 花吹雪

松山城太鼓櫓の下で飄箏、折詰、真座持ち寄り川柳連の三人、陶然となつた酒井鹿の子君「前田利家に浅井（冷々子）長政兩公か、そうすると鹿の子姐さんではどうもヒケ目だ」「どうして色氣があつてイ、よ」「酒井大老殿お一つ」「ソレソレ酒井の陣太鼓、陣太鼓と改稱せうかイヤ大ロウ大樓にせう」「デイ大樓殿」「オウイ、春じやのう」

2 兎に角やらふ

新聞柳壇の選は骨が折れる寛



が出よい花が咲く兎に解（タラズにやり給へ）「ウン兎に角やらう（何ソノ兎に角は大樓氏の

口癖）

3 五十一番靈場

西國八十八ヶ所打ち納めの札所石手寺の本堂前、大樓御夫婦の遍路姿を迎へた新海素泉君と私、「此の姿で皆様の幸福をお祈りせう」と高らかに經文を唱へる大樓氏の頬にも夫れを承る私等の眼にも涙が流れた。私は此時程大樓氏の姿を崇嚴に見た時は無い。遅櫻の散る昭和十四年四月三十日の事である。

4 川柳と俳句

熱三十八度に脈搏いくら「先生ツ川柳と俳句では、ま、まあよろしい其話はコ、が（胸を指して）治つてからですよ」病室を出た赤十字院長酒井黙禱（ホト、キス派の俳人）博士と私（五健さん病人はムツカシイですよ余程氣をつけてあげて下さい）病室では「オイ兎に解何ンとかしてくれ」苦悶の大樓氏一同暗然……

5 林檎の汁

「オイ判るか大阪の麻生路郎先生から君に是非のませて呉れと送つて来た林檎の汁だ」「有難う」取巻く一同皆な泣く。五

辭世

彌陀の浄土は遠か らめ五月旅

大樓

月旅の近い夜の病室……

6 死ぬ前には、やたらに書く？

かぶ而笑子忌、次は大樓忌にならふとは思はなかつた。多数の柳友を指導し教養して呉れた功

本年一月二十二日縣下川柳大會も終つて適宜の醉に初まる揮毫、私に依頼された短冊しき紙が見へない、それは大樓氏が皆な書いて了つた、後日同氏から丁寧な詫状と代への品々、餘分へは同氏の依頼で書を描き送つた、それが病室に貼りつけてあつた。胸が、シメツケラレル様な氣持で私は其を眺めた。

7 せんざい

「何ソノ投稿家に僕を崇拜する女の先生があつて、近い内面會する事になつて居る」「お安くないな奢るべし」「五健さんなら、せんざいで済む十杯も御馳走するかなあ」アハ、或年の或月、大洲行列車での話、惜しい事に女先生の名も所も、其の後面會したか、せぬかも聞き洩した。

8 公德院柳譽大樓居士

カレンダは「大安の丑の春此の時はゲデン／＼に酔つた大樓氏、落語漫才の連發怠慢へびりつと来る而笑子忌
シンミリした信仰家の大樓氏恩を忘れぬ大樓氏の姿が目につ

一錢五厘から

渡邊曉童

績は實に大きい。私は大樓氏を通して此の澤山の柳友が在る事を如何に心強く且つ有難く感謝して居るか靈前に合掌した。残つた柳友よ、シツカリ手をつないで行う。それが五月旅の佛へ對して何よりの供養だと思ふ。

柳誌も句會も中央柳社の存在等も夢にも知らず、海新新聞柳壇選者酒井大樓等より俺の方が意氣正に當るべからずの時昭和六年何度出しても良い所へ抜きおらん折柄、題「無駄」へ「大樓は一錢五厘無駄にさし」ケチ生と不満の塊を投げつけ一人悦に入つてゐた所が其の發表たるや「射倅心一錢五厘無駄になし」まるでこつちの投げた手榴彈が不發に終つたのを足元へ投げかへされた調子、此の時つ／＼俺は負けた。完全にノサレタ。矢つ張り自分の考へが間違つてゐたと一念發起今日に至つたのである。昭和七年春道後の句會で宮内耕朗氏に此れが大樓さんだと紹介された時の恐ろしさつたらない。オマエがああケチ生とはと来るかと大いにビク／＼だつたが、懇親會の終る頃は完全に此處に川柳を通じて親子みたいなものが出来てしまつた。爾來數ヶ年川柳に職業に全く良き理解者であり、御意見番であつた。自分を前に「心府さん此れは暴れ馬だでしつかり手綱を頼みますぞ」とまで心配して下さつた。晩年此の一錢五厘問題は良く話されたもので鐵道人川

川雜・案内

懸賞川柳

課題「齒刷牙子」七月十日
「貯金」八月十日
用紙は官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）選者麻生路郎氏
秀逸句句に薄謝を呈す
宛先 堺市出島町三五一番地
麻生路郎氏方
化粧新聞社柳壇へ

川柳草薙

東海の代表誌
一部一〇錢 一年一圓（郵税共）
名古屋市南區八熊町寺田
發行所 草薙川柳社

川柳きやり

菊判每號七十數頁
毎月一日發行 一部廿五錢
東京豊島區高田本町二ノ一四六八
川柳きやり吟社

京

一部十錢 一年一圓
京都市西木屋町四條下ル
發行所 京都川柳社

月刊みちのく

一部十五錢 一年一圓五十錢
青森縣黒石町 川柳みちのく社

川柳大陸

一部二十錢 一ヶ年 二圓
大連市清見町一五一
川柳大陸社

春聯

一部二十錢 一年二圓稅共
大連市薩摩町一六一ノ二三
森崎方 春聯川柳社

蟬

一部十錢 半年 五十錢
大阪市旭區鳴野町三〇〇
蟬螂川柳社

柳大會席上で濱田久米雄君から

先日來縣された大樓氏に聞いたとやられて面喰つたものだ。病篤しの報に駈けつけた時頻發するシヤクリの苦しさの中から、

「良く來た俺はお前の顔を見るとすぐ朗らかになるんだが今度はどうも朗らかに成れない。先日は尾道へ行つてくれて有難う

久米雄君から感激して來てゐたよ」と此れ丈言つて下さつた。再度キトクの電報に飛んで行つた時路郎先生からの手紙を五健

先生から讀み聞かされ送られたリンゴの汁をキトクの病人とも思へぬ元氣で呑み「アリガト」と

ときいたのが僕には最後の言葉だつた。三度目には「彌陀の淨士は遠からぬ五月旅」の辭世を

殘して旅立たれてゐた。公徳院柳譽大樓居士に變つてしまはれた。宵明君歸還句會には是非行

くからお前は來年記念句會をやれ、大いに應援してやるといわれた先生は二度と戻れぬ遠い旅へ一人で出てしまつた。此れで

故人追慕

石崎 柳石

大樓さんは青年のやうに感激する方だつた。お酒の好きな方でした。

飲む程に談論風發と云ふ人だつた。——今はだつた、と過去の思出をくる人の中に、噫、大樓さんは在る——最期にお目にかゝつたのが、松山の赤十字病院内……「柳石さんとお會にな

りました？」

「うん、今朝會つた……」と申された由。それが午後四時頃で、お會ひ申して一時間後で

の話——大樓さんの辭世吟を拜見して、これだと唸つた私——

あゝ大樓さんは……紫雲遙か大樓さんと呼んで

みぬ 柳石

先生は生きてゐる

元氣のいゝ顔色、温厚にて、物靜かな大樓先生が遂に逝かれ

寫眞本は元月一日西井大氏宅に於て。中央にキミ未と人愛リ一嬢・右端は左向に瀨田久米雄君。大樓氏は右端に坐す。前所の子供は列前。●んさ子



た、衷心より哀悼の意を表します。先生にお近づき願つたのは「みすか」に這入つてからでした。いろ／＼と無理なお願ひをしましてに拘らず、いつも心よく御承諾下され、吾々後進の指導にあつては特に御力を入れて下さいました。

二階の一室にて刀剣を手入れしながら、又酒盃に親しみながら柳談にふけり、佛教に就いて

の深いお話、何れも皆懐しい想

出の数々となりました。なくなられた前日御見舞に參上——御目にかゝり得たことは故郷を出てゐた僕には何かの御引合せで

ありましたのでせう、元氣だつた大樓先生、病室の大樓先生、

人の運命のはかなさをつく／＼と感じさせられます。明日より

新しい第一歩を踏出す私に、床にかゝつた先生の短冊は靜かに

呼びかけます。「更生の草鞋踏みしめ第一歩」そうだ先生は靜かに傍で見えて

山の先生のお宅へ出掛けて行つ

て「實は商業上の事で松山へ來て、十圓ばかり金が不足なので

すが二三日貸して下さいませんか」と頼んだ處、先生は深く尋

ねもせず即座に十圓貸して呉れた相だ。自分が嘘を吐かぬ故人

も嘘を云はないものと思つて居られるのだ。勿論そんな男が金

を返す氣遣ひはないが、先生は何時迄も欺されたとは思はなかつたらしい。暫くして後何かの折にこの話が出たが先生は「何

かよくよくの事が有るのでらう」と云つて不平らしい言葉は一

言も云はれなかつた。原はその後陽チブスで他界したがどう

せ地獄の方へ行つた事と思ふから極樂淨土へ行かれた先生には

永久に金を返す機會はあるまい

先生の短冊も今は思い出の一つ

となつた。今靜かに眼をつむつて思ひを致せば先生の堂々たる

體躰が見え温顔に接しお聲が聞えて來る。親しみ易い近寄れ易

い方であつた。そしてほんとうに愛媛柳界の母としての存在で

あつた。私は此の殘された偉大なる足跡を慕ひて柳界へ精進努

力することを今はなき公徳院柳譽大樓居士の靈へ誓ふ次第である。

片身の一句 由利孝輔

天地皆一つ棋局で事足れり大樓先生を思ふ時すぐ此の句

が浮んで來る。先生は碁をよく打たれた。水郷川柳社第二回大

會を昨年四月十七日拙宅で開催した折、私も少し碁をかじるので句會後先生に四目を置いて打つたが途中他の者が「碁なんかやめ／＼」と云ふので止めてしまつた。勝敗はどちらとも分らず其の時は五分／＼であつたらう。兎に角後にも先にも此れ一度である。

榎田竹林主宰

静岡川柳 一部拾錢 一ヶ年一圓(稅共) 静岡市寺町四丁目 静岡川柳會

このみ 一部拾錢 送料三錢 一年一圓 大阪市東成區中本町二好崎方 このみ川柳會

柳伊豫 一部拾錢 一年一圓廿錢 松山市南柳井町五九 愛媛川柳社

柳湯の村 一部五錢 一年五拾錢 島野縣下高井郡平穩村 柳風會

同人 一部拾五錢 一年一圓六十錢 京都市中京區六角油小路西入 川柳同人社

柳しなの 一部拾五錢 一年一圓八十錢 松本市大名町 しなの川柳社

昭和川柳 一部貳拾錢 一ヶ年二圓四十錢 大阪市東區伏見町五 昭和川柳社

柳友 一部拾五錢 一年一圓八十錢 東京市杉並區和泉町八四 柳友會發行所

各地柳壇

い の ち あ る 句 を 創 れ

雑川 本社五月例会(大阪)

五月十八日午後六時 於 誓得寺
出席者(順不同)
路郎・謙南坊・潮花・孤蓬・白面人・夕鐘
村句茂・かほる・紅多呂・默平・夜王・翠
葉・光路・六華・八九満・富士・李葉・霞
乃・アト・緑雨・頑童・春巢・素人

席題「ポート」 五 選
ポートゆら／＼ネオンの灯がゆも 光路
曳船をよけるポートは女連れ 默平
陽炎の中でポートは塗られてる 孤蓬
ぼんぼんを乗せてポートを遠く漕ぐ かほる
漕ぐたびにしぶきのかきオルなり 紅多呂
中の島戀のポートは離れてる 李葉
貸ポート中の島から夏になり 富士
ポートポート急行電車へ手を上げる 八九満
一人ではつまらぬポートあがこ来 夜王
衝突の相手のポートも笑つてる 村句茂
サービスのつもりポート屋少押し 白面人

規清稿投

用紙は原稿用紙又は投句箋の事
文字を正確明瞭に記載のこと
開催月日及場所記入のこと
締切は毎月廿五日とす
投稿先は本社宛

ブラットの朝の影踏む旅役者 孤蓬
大杉の影に繪日傘かくれたり 富士
影ばかり見詰め女は無口なり 潮花
敵壘を影に包んだ急降下 孤蓬
(秀)黙々と歩けば影も又あるき 夕鐘
席題「押ピン」 默平選
盛會に終り押ピン光るなり かほる
押ピンの堅さは節につき當り 村句茂
押ピンの形が氣になるプロマイド 一笑
押ピンを抜いて宣傳ビラをはり 富士
事變地圖押ピンの數足らぬなり 村句茂
押ピンが一つはづれた道しるべ 春巢
轉宅へ押ピン一つ残される 一笑
(秀)押ピンを喰ぐちもつてる幹事 頑童
席題「告知板」 孤蓬
友達の名が書いてある告知板 かほる選
告知板一ぺん消して又書いて 謙南坊
告知板となりの文字があつかまし 夜王
告知板もう立つことに決めて書き 霞乃
告知板ハッキリ時間書いて行き 緑雨
言譯を書くのにせまい告知板 潮花
告知板人待ち顔の田舎驛 夕鐘
告知板字までおこつてゐる様子 光路
みんな好い約束のある告知板 霞乃
告知板外野の席と書きそへる 八九満
同

理整秋豆・路郎

もう消してよいのを探す告知板 白面人
告知板後から来いと書いてあり 紅多呂
告知板前期拾得だけかゝれ 孤蓬
告知板心のこりな驛をたち 一笑
告知板さきに行くとは情けなし 李葉
(秀)出盛も過ぎ眞つ白の告知板 默平
席題「貧乏」 八九満選
本當の貧乏の味聞かされる 春巢
貧乏の村を出て行く若夫婦 一笑
自分から捨てた覺悟の貧に住み 孤蓬
子供も貧しい事を知りそめる 夜王
皆達者貧しき膳へ箸をとる 頑童
製作へ妻貧乏を引きうける 孤蓬
貧乏の子が級長に選ばれる 富士
貧乏を話せば女笑ふだけ 春巢
もう春だなど貧乏の中にある 夜王
貧乏の喧嘩大きな聲となり 紅多呂
(秀)貧乏をじつところへる糸切齒 潮花
兼題「ハンドバック」 夕鐘選
乙女の手ハンドバックの紅く照り 翠葉
ハンドバック膝の丸身に迂り落ち 富士
ハンドバックにマッチ持つてる 春巢
ハンドバックへ青春の夢をつめ 夜王
ハンドバック手頃な棚へ置き忘れ かほる
嘘々々ハンドバックは叩く眞似 村句茂
ハンドバック持ちプランを秘めて出る 潮花
ハンドバック急いで歩く物となり 謙南坊
ハンドバック生活に疲れた色になり 同
(秀)ヤレ／＼とハンドバックを退ける顔 八九満
(軸)縁を歩くハンドバックと見えざる 夕鐘
兼題「統制」 路郎選
統制で儲けて萬のついた寄附 白面人
統制は子供の遊ぶ物にふれ 潮花
統制も良し喰へば喰へぬ時の事 夜王
統制をくぐつた頭惜しまれる 春巢
部屋住みへまだ統制の波が来ず 霞乃
統制に断りばかり云ひに行き 緑雨
統制の一步手前に甘んずる 村句茂
買だめも出れず統制に困つて居 緑雨
統制の波のり越へる大市民 一笑

雑川 かほる集(大阪)

美人畫 綠吟洞報

美人畫も春らし宿の青疊 由布
失戀の暈に美人畫微笑する 秀峰
宣傳へ美人畫効果認められ 同
美人畫もあつて明るい下宿部屋 同
美人畫も入れて勇士へ慰問品 静波
美人畫も入れて美人畫一つかけ 同
洋室のこゝへ美人畫一つかけ 同
一枚の美人畫勇士ら奪ひあひ 同
スポーツが嫌ひ美人畫など蒐め 同
美人畫と向ひあつてるコップ酒 鮎美
ポスターの美人銘酒の名をおぼへ 同
美人畫へ匂ひ袋もいれて置き 同
子を抱いて見る美人畫に髪があり 同
美人畫の部屋感傷の灯がともり 斗風
春雨の夜なり美人畫懸けて見る 同
松園の美人畫があり静かなり かほる

雑川 廣島支部句會(廣島)

石原伯峯報

棧橋、女戸主、二軒家、告知板、
傘、制服、不平、樂天家
棧橋の夜霧に淡い灯が浮び 白外郎
棧橋が見えて北支の聲する 天作

髪の美は
 げに日本の
 姿なり



フケ・カユミを止め白髪・若禿
 を防ぎ明朗な青年美を創る



伊豆椿香油

伊豆椿香油本舖

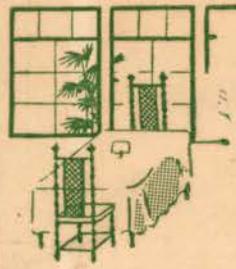
大槻彩芳園

武田發賣品

鎮痛
 制酸

胃酸過多症・胃痛に

ノルモザン錠



ノルモザン錠の治療作用は、服用後先づ胃の粘膜を被覆防護し、次ぎに分解して過剰胃酸を吸着し或は分泌腺を収斂して胃液の分泌を抑制するにあり。又本剤はロートエキスとの配合により胃痛を緩解す

【主治効能】 胃酸過多症、溜飲、胃痛、胃潰瘍、胃痙攣、便秘、悪酔、二日酔、飲み過ぎ等

(價格) 日分(3錠) 二日分(6錠) 一週四分(12錠) 一月分(30錠) 二月分(60錠) 三月分(90錠)

武田製薬株式会社 長田武衛商店 大塚市 大塚市
 (一丁目) 大塚市 大塚市

88(2)212

あ産

のため

妊娠としての大切な責任はカルシウムを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

片瀬醫學博士 監査
 榎林醫學博士 推薦

片瀬醫學博士
 「安産のために」册子呈上



ブダカルシウム錠

大阪道修町 和田卯助商店